

山本 恭正

1. 事業実施の目的

2022年6月4日から6月5日にかけて、明治大学駿河台キャンパスにおいて行われる日本文化人類学会第56回研究大会に個人発表の発表者として参加すること。

2. 実施場所

明治大学駿河台キャンパス

3. 実施期日

2022年 6月 3日(金)～2022年 6月6日(月)

4. 成果報告

●事業の概要

日本文化人類学会は、人類の文化を研究する文化人類学、社会人類学、民族学などの発展と普及を図ることを目的とする学会で、研究大会は年に一度、会場持ち回りで開催されている。今年第56回研究大会が東京・明治大学において開催され、私は発表者として持ち時間20分（プレゼンテーション15分、質疑応答5分）の研究発表を実施した。今大会は新たな試みとして「ハイフレックス型」と呼ばれる、オンラインと現地のどちらでも参加することができる開催方式で開催された。

研究大会は個人発表と分科会、開催校シンポジウム「岡正雄と現代人類学」、研究倫理委員会特別シンポジウム『『アイヌ民族に関する研究倫理指針』から考える、文化人類学の過去と未来にむけての展望』、男女共同参画・ダイバーシティ推進委員会特別シンポジウム「先達に聞く！聞き語りサロンー波平恵美子先生をお迎えして」、学会賞・奨励賞・受賞講演などが行われた。特に印象に残ったのは、明治大学で教鞭を取った岡正雄が日本でまだ文化人類学会が緒につかないころからどのように民族学と呼ばれる学問と関り、日本の文化人類学が形成されていったかというシンポジウムである。柳田国男との確執やマルセルモースとの出会い、海外留学のエピソードといった人間らしい側面も紹介され、偉大な研究者が少し身近に感じられた。また、波平恵美子先生の「学会発表はなるべく多く行い、そのフィードバックを通して論文投稿につながっていく」という示唆に富んだ激励、アドバイスなども印象に残った。

6つに分かれて行われた分科会では「ゾミアの地球環境学・四国山地の地質・生態・歴史」に参加し、「デザインとしてのランドスケープの名付け」と題して、徳島県神山町での活動を事例とした発表が印象に残った。日常生活のささやかな工夫や思い入れのある景色に住民が行う名づけが、景観の形成にとって重要であるという視点は意外性を感じた。また、石垣に注目して、詳細な分析を行っているところが長期にわたって集落に入り込んでマイクロな視点で行う文化人類学の調査として参考になった。

個人発表では全体的に新型コロナウイルスの影響もあってか、どちらかというと地域研究よ

りもテーマや理論に沿って論じていく傾向が高いように感じられた。抽象度の高い概念や理論に特化して、そこにこだわって論じている人が多いため、現実に行われている事象や生活している人びとの顔が見えづらく、実生活に応用可能な理論を構築するという趣旨はさほど多く感じられなかった点が少々残念であった。

●学会発表について（発表を行った方のみ記入してください）

発表タイトルは「信仰の山の創出——熊野地方における道の価値と地域社会の再編」で、主に信仰の山と道をテーマとして発表した。まず、「信仰の山」が権威付けられた遺産言説で、熊野地方において文化遺産の道とそうでない道とを区分する役割を有していることを説明した。その後、近年の文化遺産概念の流れを概観し、今までの国家を中心とした公的機関が文化遺産マネジメントの全責任を負い、文化遺産を独占的に管理し、費用の大半を負担するという従来体制、前提が崩れてきていることについて述べた。その後、今回の発表の目的が道の遺産化の過程で地域性を扱うことの重要性を明らかにすることであることについて触れ、具体的な調査地の概要と事例（尾鷲藪漕ぎ隊による尾鷲トレイルの創出とトレイルランニングをめぐる葛藤と混乱）を紹介した。

結論は、文化遺産ではない道である尾鷲トレイルが地域社会の精神と深く結びついており、様々なネットワークを構築しながら記憶やローカリティの継承をおこなっていること。世界遺産の道の再発見から始まる、熊野地方の遺産化とは端的に言って空間を形成することであり、新たに道を創出することで押し付けられた表象としての熊野イメージから脱却・再構築する試みがなされていること。また、トレイルランニングイベント開催をめぐる事前協議では、どのように文化遺産を活用するかという議論が現状では地域を巻き込んで十分になされることが難しいこと、結果的に地域社会の参加を遠ざけてしまったこと、有無を言わさぬ商業的価値が介入することによって文化行政と政策・観光部門が対立の構図になってしまったことなどについて述べた。

質問では、山のなかの道がどのように信仰と結びついているのか。道の担い手コミュニティとムラ意識はどのように関係しているかという二つがあがった。前者は、山自体が信仰の対象であり、尾根を歩くことによって超越的な力が得られるとされる修験道や信仰の対象となる場所、地蔵、塚、自然物などがあり、そこにつながる道を整備することによって信仰とつながっていると回答した。続いてコミュニティとムラ意識の関係性については、調査した限りにおいてムラ意識はさほど感じられず、先に住民の活動があってそこから文化遺産が生じてくるのではなく、どちらかという創出したい文化遺産が先にあって、そこに新たに地域コミュニティが創造されるという表現の方が現状に即しているのではないかと回答した。

●本事業の実施によって得られた成果

・外部の自分のことを全く知らない研究者に対して、プレゼンテーションするにあたって画像や図を多用し、なるべく文字数を抑え、分かりやすく説明しようと最大限努力した。結果的に、そ

れでもまだ文字数が多く、情報量自体を抑制して、情報の強弱をつけることの重要性を感覚として学んだ。

・博士研究の方向性を前面に打ち出して行った発表に外部の研究者から特に悪くはないという反響があったことで、研究の方向性が間違っているわけではないという手ごたえを感じることができた。

・文化人類学会における特に日本人の発表者は理論重視で、現代人類学の理論と照合して論じないと、どんなに事例でアピールしたところで、評価されない印象を持った。単なる報告会のような雰囲気になってしまい、抽象度の高い議論に対する知見や上乘せ、批判などが求められていると感じた。また、事例においても単にインフォーマントから話を聞いてきた内容や、報告書から取ってきたデータではインパクトが弱まってしまうため、今後は実践に応用可能な具体的な理論構築を重視しつつ、理論的背景に言及するスライドを多めに組み込み、一つ一つのデータの質がどのように高められるかを考えて調査スライドに反映させていかなければならないことがわかった。

・報告した事例がキース・バツソの〈場所〉論で述べられている内容に近いという指摘やコミュニティという用語の用法をめぐって注意する必要があること、無理に多くの団体に言及せず尾鷲藪漕隊だけにフォーカスして論じた方がいいと思われること、総合地球環境学研究所の松田素二先生が三重県東紀州地域で社会調査活動を行い、まとまったデータを保持していることなどといったご意見、ご指摘、情報提供を、発表後の雑談などで得ることができた。

・今大会では文化遺産や文化財を取り上げて発表している分科会や個人発表が見当たらなかった為、今後は文化人類学会だけでなく、地域社会学会や環境社会学会などといったより地域研究を重視する全国規模の研究会でも発表して、より事例や地域に踏み込んだ議論を全国の研究者に聞いてもらえるように尽力したい。

●本事業について

文化人類学を専攻する大学院生にとって現地における調査研究や国内外の学会発表などの研究活動は非常に重要であり、報告者は初めて博士課程において学外における研究発表を実施することができた。この事業は非常に有益な事業であり、今後も継続して欲しい。